

## 開催報告書

### 第2回メディア制作者と医療者がつながる座談会

#### 「女性の健康～伝えにくいことをいかに伝えるか」

2017年4月19日 東京

共催： メディアと医療をつなぐ会・メディカルジャーナリズム勉強会  
東京大学大学院医学系研究科医療コミュニケーション学

協力： 一般社団法人 日本放送作家協会



女性の活躍推進がうたわれる現代社会において、女性の健康について、改めて課題を共有し解決につなぐために、メディア（報道・情報系、エンタメ系）と医療はどのようにコラボできるのか。



公益財団法人性の健康医学財団常務理事の齋藤益子氏（宮崎県立看護大学大学院看護学研究科

長）は、長年青少年への性教育や相談を通じて、妊娠・避妊、性感染症予防などの具体的な行動について相手への要望を伝えるとき、「私メッセージ」の方が相手批判とならず、相手に伝わりやすいことを紹介された。続いて、ハフ



イントンポスト日本版編集長・竹下隆一郎氏は、企画

「Ladies Be Open」立ち上げの裏側を紹介。個人の声をしっかり伝えるネットメディアの特徴を生かし、オープンに話すことで、壁と感じていた家族・友人・職場の協力が得られて、より働きや

すい職場環境を生み出せるのでは、との提案があった。脚本家の東多江子氏（日本放送作家協



会理事、日本大学芸術学部講師）は、現実とドラマの差はあるが、ドラマを見て育った医療者が現実の医療現場にも影響を与えているかもしれないとの感想。間違った医療

知識を伝えることはしないが、フィクションの使命は感動を与えることであり、脚本家は、医療者や患者の人間像を取り込みたいと常に考えていると締めくくった。



つづくパネルディスカッション（左から、市川氏、竹下氏、井土氏、東氏、齋藤氏）では、市川衛氏（メディカルジャーナリズム勉強会代表）のファシリテーションで、事前に参加者から頂いた質問についてメディア制作者、医療者の立場で話し合った。

次回は7月に開催予定。

Reported by 加藤美生（東京大学）

Published by メディアと医療をつなぐ会事務局